

「情報処理学会論文誌：プログラミング」の編集について

プログラミング研究会論文誌編集委員会

情報処理学会では、研究会の活性化を目指して様々な改革を進めている。プログラミング研究会はこの流れを受けて、研究会のあるべき姿について徹底的な討論を行ってきた。その帰結として、研究会独自の論文誌の編集にいち早く踏み切ることを決定した。

研究会論文誌「情報処理学会論文誌：プログラミング」の特徴と意義は大きく3つある。第1は、従来の「論文」に対して想定されてきた対象分野や査読基準では必ずしもカバーしきれない、多様な成果の公表の場を提供することである。第2は、投稿論文の内容を研究会で発表することを義務づけることによって、迅速で的確な査読を実現するとともに、議論の結果の最終稿へのフィードバックを可能にすることである。第3は、研究内容の表現に必要であると認められれば、長大な論文も採録可能としている点である。

本論文誌を通じて、日本のプログラミング分野の研究活動を盛り上げていきたい。読者諸氏からの多くの論文投稿を期待する。

1. 対象分野

プログラミングは、コンピュータの誕生と同時に生まれた伝統的な分野であるが、コンピュータがある限り不可欠な技術である。並列分散処理やマルチメディア応用など処理内容が高度になるにつれて、プログラミングの重要性は増すことがあっても減ることはないであろう。

「情報処理学会論文誌：プログラミング」は、プログラミングに関するテーマ全般を専門に扱う論文誌である。具体例として次のようなテーマがあげられる。

- プログラミング言語の設計，処理系の実装
- プログラミングの理論，基本概念
- プログラミング環境，支援システム
- プログラミング方法論，パラダイム

これらを応用したシステムの開発事例も対象に含まれる。また、上記以外でも、プログラミングに関する面白い話題であれば対象となる。

2. 編集方針

本論文誌は、プログラミング研究会における発表と論文誌投稿が密接にリンクされている点に特徴がある。

論文誌への投稿者が用意する研究会発表用の資料が、そのまま本論文誌への投稿論文となる。

研究会発表をせずに本論文誌に投稿することはできないが、逆に、本論文誌への投稿をともなわない研究会発表は可能である。そのような発表や、論文が不採録となった発表については、アブストラクトが本論文誌に掲載される。従来のプログラミング研究会の研究報告は廃止し、その代わりとして、研究会登録者には本論文誌が配布される。

本論文誌に掲載する論文は、通常のオリジナル論文と、サーベイ論文の2種類とする。どちらの種類であるかは、著者自身の指定によって決まる。論文の記述言語は日本語、英語のいずれかとする。論文の長さには制限は設けない。

3. 査読基準

基本的に、減点法に陥ることを避け、論文の良い点を積極的に評価するという方針を貫く。具体的には、新規性、有効性などの評価項目のうち、どれか1つの点で特に優れていると認められれば採録する。体裁のみが整った論文より、若干の不備はあっても技術的な貢献の大きい論文を積極的に受け入れる。

このような観点から、たとえば次にあげるような、従来は論文としてまとめることが難しかった内容について論じた論文もできるだけ受け入れる。

- プログラミング言語の設計論
- システムの開発経験に関する報告
- 斬新なアイデアの提案
- 概念の整理，分類法，尺度の提案
- 複数のシステムその他の比較

4. 投稿から掲載までの流れ

本論文誌への投稿希望者、および研究会での発表希望者は、発表会開催日の約2カ月前までに発表申込みをする。具体的な方法は研究会ホームページ <http://www.ipsj.or.jp/sig/pro/> を参照していただきたい。申込みの際には、所定の申込みフォームに本論文誌への投稿の有無、オリジナル論文とサーベイ論文の種別指定を明記する。また、アブストラクト（和英両方、和文は600字程度）を提出する。

論文投稿を希望した場合は、研究発表会の約1カ月前までに、別に定めるスタイル基準に従ったカメラレディ形式で論文を提出する。

毎回の研究発表会の直後、編集委員会が開催され、各論文について1名の査読者が決定される。査読報告をもとに、編集委員会は採録、条件付き採録、不採録のいずれかの判定を行い、発表会開催後3週間程度で発表者に採否通知を行う。照会の手続きはないが、条件付き採録の場合は採録のための条件が示される。また、論文改善のための付帯意見が添付される場合がある。この場合は、3週間以内に改良版を作成する。最終的に採録となった論文が、学会の諸手続きや校正を経て掲載される。

5. 研究発表会

2005年度の発表会は次のとおり行われた。

- 6月 1日
 8月 3～4日 [SWoPP-並列/分散/協調プログラミング言語と処理系]
 10月 11～12日
 1月 16～17日
 3月 16～17日

2006年度の発表会予定は次のとおりである。

- 6月 1日
 7月 31～8月 1日 [SWoPP-並列/分散/協調プログラミング言語と処理系]
 10月 12～13日
 1月 18～19日
 3月

6. 編集母体

本論文誌は、下記のプログラミング研究会論文誌編集委員会の責任で編集を行う。各研究発表会ごとに2名の担当編集委員が割り当てられ、投稿論文の査読プロセスを主導する。

2005年度プログラミング研究会論文誌編集委員会

- 委員長 八杉昌宏 (京都大学)
 委員 磯部祥尚 (産業技術総合研究所)
 岩崎英哉 (電気通信大学)
 小川宏高 (産業技術総合研究所)
 小宮常康 (豊橋技術科学大学)
 田浦健次朗 (東京大学)
 中田秀基 (産業技術総合研究所)
 西崎真也 (東京工業大学)

- 長谷川立 (東京大学)
 増原英彦 (東京大学)
 真野 健 (NTT)
 南出靖彦 (筑波大学)
 村上昌己 (岡山大学)
 脇田 建 (東京工業大学)
 渡部卓雄 (東京工業大学)

2006年度プログラミング研究会論文誌編集委員会

- 委員長 岩崎英哉 (電気通信大学)
 委員 磯部祥尚 (産業技術総合研究所)
 小川宏高 (産業技術総合研究所)
 小川瑞史 (北陸先端科学技術大学院大学)
 鎌田十三郎 (神戸大学)
 小宮常康 (豊橋技術科学大学)
 中田秀基 (産業技術総合研究所)
 西崎真也 (東京工業大学)
 長谷川立 (東京大学)
 前田敦司 (筑波大学)
 増原英彦 (東京大学)
 真野 健 (NTT)
 南出靖彦 (筑波大学)
 村上昌己 (岡山大学)
 八杉昌宏 (京都大学)
 脇田 建 (東京工業大学)

本号の編集にあたって

- 2005年度第5回研究発表会
 担当編集委員 脇田 建, 増原英彦
 2006年度第1回研究発表会
 担当編集委員 南出靖彦, 小川宏高

本号は、2005年度第5回プログラミング研究会(通算第58回)からの採録論文2件と、2006年度第1回プログラミング研究会(通算第59回)からの採録論文4件からなる。

2005年度第5回研究会は、2006年3月16日から17日に東京大学生産技術研究所において、2006年度第1回研究会は、2006年6月1日に産業技術総合研究所秋葉原サイトにおいて開催された。どちらの回もテーマを特に設けず、幅広く論文を募集した。研究会論文誌への投稿をとまなう発表のほかに、論文投稿をとまなわない発表を歓迎したことも、これまでと同様である。その結果、2005年度第5回は8件、2006年度第1回は7件の発表(発表25分、質疑20分)が行われた。

投稿原稿の査読を議論する編集委員会会合は、開催日の昼休みや研究会終了後に編集委員ならびに編集委員会が出席を依頼したメンバで現地にて複数回開催した。ただし、投稿論文の共著者となっているメンバは、その論文についての議論の間は退席している。委員会会合では先の節に記した対象分野、編集方針および査読基準に従って、各投稿論文の評価できる点について意見が交され、その場で可能な限り査読者の選定を行うようにした。各査読者は、編集委員会での議論をふまえて査読を行った。

最終的に、2005年度第5回研究会で投稿を希望したうち2件の論文（通常論文）、2006年度第1回研究会で投稿を希望したうち4件の論文（通常論文）が採録となった。これらの採録論文の掲載に続き、それ以外の発表については1ページの概要を掲載してある。掲載順序は、論文、概要それぞれについて当日の発表順に従うことにした。

以下では2005年度の活動についてまとめておく。

2005年度は第54～58回の5回の研究発表会を開催した。このうち、第55回（8月、SWoPP2005）が他研究会との連続開催であり、残りの4回が単独開催である。SWoPPの回には特集テーマを定めたが、特集テーマと直接は関係しない発表も常に受け付けるようにした。発表会では前年までと同様50名近い参加者が集まることもあり、発表後の質疑応答も大変に活発であった。総発表件数は49件であった。これは、2004年度の58件から減少となり、発表キャンセルが2件あったとはいえ、1995年以降最も件数の少なかった2003年度の51件を下回った。理由の1つとしては、2005年度の最後の第5回での発表件数が少なかったことがある。年度最後の回に発表が多く、年度最初の回に発表の少ない傾向への対策として、試験的に同時期募集を行い、年度最初の回への誘導を図ったという

点からは予想される結果ではあったが、2006年度第1回が必ずしも多くなかったことは残念であった。

トランザクション（PRO）に投稿された論文は、まず研究会で発表され、発表会の直後に開催されるトランザクション（PRO）編集委員会において議論し、査読者を定めて本査読を行った。投稿の有無にかかわらず、1件あたり発表25分、質疑・討論20分の時間を確保し、参加者が研究の内容を十分に理解するとともに、発表者にとっても有益な示唆が得られるように努めた。発表総数49件中投稿論文からの、総採録件数は17件となり、昨年度の26件から減少している。採録率は約45%である。

1998年度のトランザクション（PRO）の発刊以降8年が経過した。英文論文はIPSJ Digital Courierにも掲載されるようになり、さらにIMT（Information and Media Technologies）に掲載されるようになるなど新しい動きがある。今後、英文論文が増えるきっかけになるであろうか。

最後に、活発な研究会活動を支えていただいた、発表者、発表会参加者、論文投稿者、査読者の方々へ感謝の意を表したい。大変短い査読期間にもかかわらず論文査読の労をとっていただいた方々の氏名を掲げる。

2005年度査読者

阿部洋文，五十嵐淳，岩崎英哉，大岩 寛，
大山恵弘，小川宏高，小川端史，鹿島 亮，
神谷年洋，河辺義信，窪田昌史，小出 洋，
河野健二，河野真治，佐藤三久，志築文太郎，
首藤一幸，鈴木 貢，早田恭彦，千葉雄司，
寺田 実，中野圭介，中田秀基，西田 晃，
原田康德，前田敦司，増原英彦，緑川博子，
村上昌己，森眞一郎，八杉昌宏，脇田 建，
渡部卓雄